

句集

初蝶来

増永
わかば

序

神戸市舞子の増永わかばさんも句集を出されることとなった。

彼女とはインターネット句会のメンバーとしてご縁が生まれた。既に老人大学で学ばれておられたようであるが、同じクリスチャンとして私の活動を応援してくださったのだと思う。

虫の夜母の寝息の恙無く

母に添ふ夜の目覚めや春の雨

高齢のお母様のために夜はずっとそばにいて介護しておられるという。一方昼間は、俳句や茶道を趣味とする彼女のために優しいご主人が留守を守ってくださるのだそうだ。

家路へと海に沿ふ道月見草

春宵に始まる渚コンサート

遠出に制限のある彼女なのでどうしても地元須磨明石の作品が多くなるが、住みなした人にしか詠めない佳句にも恵まれるのである。とりわけ彼女を語るには代表作である次の一句を紹介しない訳にはいかない。

いかなごを炊きて息災伝えけり

神戸明石では春先に瀬戸内の海で捕れるいかなごを各家庭の味付でくぎ煮にし地方に住む家族や友人へ送るという習慣がある。一筆箋に短く挨拶を書いて消息を伝え安否を問うのである。短いこの一句からこの地に息づく人たちの優しい人情を感じて欲しいのである。

クリスマス母の白寿を祝ひけり

窓あけて介護の母と初御空

母より先に召される訳にはいかない…と彼女は言われる。けれどもたとい神さまのご計画がどうであったとしても信じて委ねるしかない。

わかばさんには、応援してくださいさるご主人とともに揺るぎないキリスト教の信仰がある。どのような逆境にあっても慰め励ましてくれる俳句の仲間がいる。わかばさんの今後の人生の上に続いて神様の守りと祝福があるようにと祈って序のことばとしたい。

平成三〇年七月吉日

やまだみのる

每日句會入選句

温かき日差しに伸びる万歩計

初花へ寄せたる母の車椅子

七色を綴る架橋の春灯

甦
る
ご
と
万
蕾
や
梅
古
木

明
石
の
門
航
き
交
ふ
船
に
日
脚
伸
ぶ

海
苔
粗
朶
に
寄
せ
て
た
ゆ
た
ふ
小
舟
か
な

沖遠く漁火残る冬の朝

車椅子降りて拾ひし彩紅葉

地下街へ逃げ込んでくる落葉かな

炉を開く心尽くしのお善哉

爽やかに盤木高鳴り進水す

浮草の万華鏡めく紅葉かな

霧深しゴーストとなる架橋かな

名残の茶四百年の窠れ釜

虫の夜母の寢息の恙なく

漁火の星と煌めく沖涼し

朝涼の沖を過ぎゆく白帆かな

家路へと海に沿ふ道月見草

水馬カーレースめく用水路

遺跡なる豎穴住居梅雨じめり

羅の立ち居涼しき茶会かな

黄金波打つ播磨路の麦の秋

見えそめて樹間に白き一瀑布

白壁の櫓にゆらぐ若葉影

春宵に始まる渚コンサート

春落葉本丸跡を埋めをり

つちふるやおのころ島のなきごとく

居留地に瓦斯灯点る朧かな

恙なる母へ一菜土筆摘む

眼が命とていかなごの競られけり

源平の靈を祀りし梅の宮

母に添ふ夜の目覚めや春の雨

いかなごを盛る手秤に狂ひなし

島影と思ふ灯しや夕霞

海の橋大きく撓む四温晴

水仕事一つ残りし湯ざめかな

紅葉の朱に染まりたる一の谷

猫車錆びてころがる冬菜畑

冬の海一条の日矢射しにけり

稜線の折れ線グラフ霧襖

大紅葉天蓋なせる野点かな

野ざらしの羅漢はなべて秋思顔

落暉いま刹那と思ふ秋の海

軒高く積まれし薪やちちろ鳴く

炎天や着物の裾のまとひつく

台風の尻尾か海の波尖る

片蔭を辿る介護の通ひ道

髪少しつめて身軽に初夏の旅

定例句会入選句

棟の香届く古墳の静寂かな

春惜しむ野草の小径逍遥し

波の綺羅寄せて汐入川の春

春光をあまねく反す瀬波かな

斑猫の出迎え多き山路かな

秋の日を弾きて湖の藍深し

石 走 る 著 き 瀬 音 や 秋 山 路

水 澄 む や 堰 落 つ 水 の 音 も ま た

煤 こ け て 蠟 涙 し る き 滝 不 動

大岩の奈落に響く鼓滝

展けたるダム湖に望む青嶺かな

風あそぶ羊齒群落の目に涼し

倒木を沈めて山湖澄めりけり

喬木のグリーンシャワーや風薫る

花屑を虜としたる潦

石窟の羨道暗く菜種梅雨

春愁やピエタの像に佇ちてより

照り翳りなす彩窓の春日かな

尖塔の十字架光る春の天

梢より洩るる鳥語や春隣

紅葉影深き祈りのマリア像

そこに猪のぬた場や秋山路

子規句碑に佇みをれば秋の声

句帳もておもひおもひに萩に佇つ

青松の影ひろひつつ避暑散歩

林立す帆柱に立つ雲の峰

隠沼を埋めつくして未草

梅雨明けの樹間を縫ひて陽の光

雲切れて青空のぞく青嶺かな

昨夜雨を湛へて園のバラ薫る

枝を翳す園の要の花檣

心地よき風に誘はれ薔薇薫る

滴りが苔をさ走るなぞへかな

存問のごとくに余花に佇ちにけり

風に揺れ唄ふがごとき新樹かな

青空へ突き上ぐるごと辛夷の芽

玄室の羨道しるき梅の影

梅の香に包まれるのぼる丘の道

室町の涅槃絵に見る古びかな

マリア像祈る背中に冬日さす

出揃ひて亀日向ぼこ石舞台

あひ互ひ息災祈り年忘れ

広芝へ黄落やまぬ大樹かな

山荘へなだるるごとく山紅葉

蘭亭の飛簷掠めて紅葉散る

冬木立羊齒群落を褥とす

叢林の磐座に佇ち秋惜しむ

秋さぶや触るれば動く力石

叢林の裂け目に覗く天高し

秋日さす杜抽んでし甌岩

連山の稜線著き秋の晴

秋 茜 湧 く 境 内 や 力 石

秋 天 へ 緑 青 の 千 木 尖 り け り

秋 水 の 高 鳴 る 峡 の 奈 落 かな

秋めくや山路に昨夜の出水後

法師蟬四囲にしば啼く山湖かな

新涼や谷川の水高鳴りて

蒲の穂の揺らぐは鯉の仕業かな

昨夜の雨ためて輝く薔薇百花

溪川の響く奈落の緑濃し

五月晴苑は百花の香に満つる

石楠花の山へと続く茶庭かな

うぐひすのしきり山湖に舂して

雨雫溜めて犇めく万朶の芽

誓子句碑冬日の漏るる樹下ここに

大鳥居高きを仰ぐ淑気かな

枝絡む日に数多なる冬芽かな

クリスマス母の白寿を祝ひけり

紅葉山撫でゆく雲の影法師

蘭亭の飛簷掠めて黄葉散る

秋水へ戸毎に渡す石の橋

万葉碑訪ひし山の辺薄紅葉

高原の四方は漆黒星月夜

連山の影屏風立つ星月夜

風さやか遊行のオール重くとも

うねりあふ風の広葉に蓮開く

小流れの奏づに添ひて避暑散歩

比翼塚やすかれと訪ふ木下闇

小流れが樹林縫ひゆく涼しさよ

囀れる森のベンチに憩へとぞ

水脈幾そ広げて春の鴨の陣

ベジタブルガーデン広し蝶遊ぶ

若芝に保育乳児のあやふい歩

四阿の春陰深き亭午かな

風音に混じり
笛鳴届くなり

うす暗き石窟の中
冴返る

蠟梅の香や
みそぎ橋渡るとき

東雲の海苔粗朶に添ふ舟の影

走り根も隠るるほどや落葉嵩

四阿に憩へば通ふ秋の風

秋の雲白し六甲際やかに

美しき彩窓仰ぐ堂涼し

泳ぐかに川面の影や鯉のぼり

ロザリオの丘もとほれば初蝶来

雪しまく海の昏さを思ひけり

六甲の嶺々の靄ひて雪催ひ

枯蓮 矢刀折れに動かざる

庭園の順路を綴る石 露黄なり

苔むせる岩を洗ひて水澄める

繫舟のマス
ト林立秋の晴

紺碧の海に散らばるヨツトかな

飛石を洗ふ瀬音の楽涼し

雲の峰六甲連山従へて

梅雨霧の沖に島影消えにけり

天蓋をなせる老松梅雨の闇

若楓日の斑の揺るる川明り

蘭亭の古りし石文余花の影

羨道をふちどりて草芳しき

石棺を抱く古墳や百千鳥

轉を総身に浴びて園巡る

窓あけて介護の母と初御空

王義之の臨書に秋思憑きにけり

谷川の流れへそよぐ花芒

水澄むや小さき堰に稚魚走る

深山道つつじ彩る巖襖

花吹雪胡蝶の乱舞さながらに

走り根を階として山椿

人丸の丘へ椿の藪の道

海峡に霧笛しきりの朝かな

海峡は船の銀座や雲の峰

野の草の朝日をはじく露涼し

波止涼し漁火遠くまたたきて

下闇に供華新らしき無縁塚

天平の宮跡わたる風涼し

梅雨晴間満艦飾に濯物

若葉風通ふ堂縁去りがたく

老鶯や寺苑の森の奥深し

青銅の伽藍包みて夏木立

鐘楼に新樹の影の揺れやまず

いかなごを炊きて息災伝へけり

盆梅や花芽の立つを見逃さず

吟行句会入選句

薫風や古都一望の高欄に

塔頭の長き築地や古都薄暑

檻縷布を引き上ぐるごと若布刈る

沖を行く巨船の水脈に風光る

トロ箱の蓋押し上ぐる蛸の足

朱の橋にぼんぼり吊るす花の宮

御手洗は苔むす巖水温む

山茱萸の黄を点したる神の杜

商ひの道にはみ出す年の市

仁王門凌ぐ大樹のもみぢかな

舌頭に千転しつつ落葉踏む

山裾を拓きし里のダリア園

幸せの鐘鳴りわたる花野かな

築山の松のしもとにつつじ燃ゆ

里のバス降り立てば草芳しき

石走る流れに沿ひて石露黄なり

風さやぐ築地に仄と薄紅葉

萩叢を分け入りて読む一碑かな

東山望む神苑緑さす

蓮池のしがらみに鯉犇めける

遣水の流れに沿ひて濃紫陽花

満目の緑に染まる心字池

楼門へ影揺れやまぬ若楓

石畳覆ふ寺苑の緑かな

万葉の歌碑を綴りし若葉径

参道の天蓋となる懸り藤

神の杜肩にしきりの春落葉

沢水に屑流れ行く藤の園

陽を閉ざす大樹の杜の著莪浄土

花陰に屯す園のフラミンゴ

溪声に沿ふ参道の散紅葉

秋時雨苔庭いよよ艶めきぬ

緑青の社に挿頭す紅葉かな

秋水へ翳なす樹々の藍深し

権現の急磴仰ぐ梅雨の晴

花菖蒲愛づる畦道水匂ふ

酒蔵をめぐる吟行街薄暑

一茎のつゆ草手向く女郎塚

鬼貫碑古りて夏草覆ひけり

山門の一步に満つる牡丹の香

きらめける万朶の雫木の芽雨

千本といふ満目の谿紅葉

倒木の谷へなだるる冬木立

切り岸に炎のごとき紅葉かな

秋雨に彩深めゆく里山路

一望の港は指呼の霧の中

秋天へ飛簷重ねて五重塔

きちきちや若草山を斜滑降

夏木立深呼吸して朝散歩

高舞ひてツリーのごとく蛍群る

畦涼しS字を畳む千枚田

夕帷まとひて白し栗の花

夕さりて山影映す植田かな

大櫂千手をかざす青葉かな

農具小屋すつぽり包む凌霄花

里山の裾といふ裾栗の花

古都薄暑インクラインをたもとほり

苔庭に影うち重ね若楓

日に透けて若葉耀よふ水路閣

若葉雨無縁の塔のやすかれと

小流の水際を埋む名草の芽

春泥に足なとられそ歌碑の径

皇女墓の光背のごと紅葉燃ゆ

魁はいろはもみぢや寺の秋

金魚田の稚魚抜け出せる用水路

盤石の苔を結びて滴れる

万緑の奈落に響く谿の楽

土雛の頬ふくやかに巖の上

モビールの玉の中なる豆雛

楼上に一望千里
古都の秋

大伽藍抱きて
東山粧ふ

末枯の園の一隅
女郎塚

涼風の通ふ吉野の杉木立

資料館開けし一步に黴匂ふ

夏霧の流る吉野の杉美林

木下闇抜けて丹生の瀬滔々と

吊橋を渡り再び木下闇

夏霧の深吉野の山泰然と

涼風に吹かれ存問青畝句碑

杉美林ぬひつつ間歩へ春惜しむ

古時計刻一つつ打つ春山家

雪解水垂るる山門走り抜く

春愁や彩色褪せし羅漢像

色鳥来朝の光の洩る森へ

真夜覚めて明日香の里の良夜かな

近づきて案山子とわかる棚田かな

萩葎枝垂れて風の生れけり

連子窓続く回廊若葉風

一年の来し方想ふ柚湯かな

山茶花の散り敷く門を踏み惑ふ

茅葺の千木の崩れや冬ざるる

金堂の鴟尾輝やける小六月

苔むして暗き参道露葎

緑陰の歌碑に歩を止め憩ひけり

高殿の四阿に降る花檣

古稀迎ふ友へ真紅の薔薇贈る

佇みて瀬音に秋を聞きにけり

春光や人影に鯉集まり来

丁目石落葉に埋まる古道かな

秋嶺を背に砦めく大伽藍

鎮もれる仁徳陵の秋の声

出土せし埴輪の顔に愁思あり

秋風や洞穴閉ざす真田山

草花に通ふ風あり野路の秋

緑蔭の小さき祠は芭蕉堂

あとがき

この度は思いがけず自分の句集をつくることができ、とても嬉しく夢のようです。

老人大学のOB会で吟行や句会を楽しんでいましたが、その先輩から紹介していただいた『ゴスペル俳句』とのご縁を授かりました。お陰様で毎月の吟行句会に連れて行っていただける幸いと良き句友に恵まれることができました。とりわけ明日香、吉野での一泊吟旅では本当の俳句の楽しさを体験させて頂き、生涯忘れられない思い出です。

出来あがった句集を紐解きますと、その時々の方が懐かしく鮮明に思い出され感慨ひとしおです。母の介護のために何かと戦いもあり制約もありますが、大好きな俳句を支えにこれからも頑張っていきたいと思えます。

最後になりましたが、老母のことにも触れてくださったみのるさんの序文あまりにも身に
余るおことばに胸が熱くなりました。心から感謝しお礼申し上げます。また、背後で祈り支
えてくれる主人と親しくお交わりくださる句友のみなさまにも感謝いたします。

平成三十年七月吉日

増永わかば

『初蝶来』 増永わかば句集

平成三〇年七月三〇日

印刷

平成三〇年七月三〇日

発行